

書 評

新村 拓 著

『国民皆保険の時代——一九六〇、七〇年代の生活と医療——』

本書は、2006年に出版された新村 拓編『日本医療史』（吉川弘文館）に続く時代を取り上げたものである。前著が、その「あとがき」に記しているように、「1961年にスタートした国民皆保険体制はその（日本国憲法第25条の：筆者注）生存権・健康権を具体的に保証する仕組みとなっている。」が「その仕組みも、このところにきて大きく揺らいでいる。」とした「国民皆保険制度」の意義と問題点を、検証しようとしたものである。

本書の内容は、次の11章と「あとがき」とからなっている。

第1章 国民皆保険への途、第2章 国民皆保険が進める医療の社会化、第3章 医療を支える仕組みの変化、第4章 変貌する社会の中での保健医療、第5章 薬好きと薬づけ医療のはざま、第6章 結核から成人病（生活習慣病）の時代へ、第7章 医療施設からみた高度経済成長期、第8章 変化する開業医と患者の関係、第9章 社会的関心が高まった高齢者の医療と介護、第10章 増えつづける医療費の重圧、第11章 注視される医療倫理と医師患者関係の転換。

本書の眼目は、第1章と第2章であり、戦後十数年しか経っていない時期に、国民皆保険を具体化していった、当時の社会保障関係当局と、これに対する医療関係団体等との葛藤が描かれている。第3章では、国民皆保険に対する医師会を中心とした医療界の反応、すなわち保険診療報酬の抑制、制限診療、いわゆる二重指定などの問題をあげ、患者側からは保険診療が差別医療に繋がるのではないかという危惧などはあるものの、「国民皆保険は、患者を増やして、医師の生活を安定させる役割を担ったもの」としている。第4章から第8章には、この時代の社会的背景、わが国の医療文化、疾病構造の変遷、医療施設・医療関係

者の動向などを取り上げている。また、第9章では高齢者の医療と介護、第10章では医療費の増加対策、第11章では医療倫理と医師患者関係について述べているが、これらはいずれも今日的な課題であるといえよう。

著者の手法の多くは、厚生省（現厚生労働省）の各種審議会や官庁の統計資料、当時の新聞（殆どが「朝日新聞」）の見出しや切り抜きなどを示して、その時代の医療を中心とした動きを、摘出しようとしたものである。具体的な数字や制度の創設・改廃が、その時代的な背景と共に示しているので、よく理解できると思われる。しかし、国民皆保険制度が始められ、充実していった過程と、現在の高齢者医療問題や医療費抑制の状況などを、ないまぜに示して、当時の動きを、現在の視点で、遡って評価しているようであり、歴史的な流れを知ろうとする読者にとっては、分かりにくい記述となっている。副題にあるように、1960、70年代の生活と医療に絞っても、述べるべきことは多々あり、それらが、現在の混迷の原因であることも、浮き彫りすることが出来たのではないと思われる。

本書に取り上げられているのは、主として1960、70年代の医療とそれを取り巻く社会と生活であり、専門的な文献とともに、川端康成、幸田文、井伏鱒二、吉行淳之介、室生朝子、網野菊、近藤啓太郎、高見順、安岡章太郎等の著作を引用して、当時の世相等を描写しているのは、興味深いものがある。そして、これらの状況は、戦前から現在に至る歴史の流れの中に位置づけられたものであることを、読み取ることが出来る。その意味で、本書は前著である『日本医療史』に続く時代を埋めるものになっているといえよう。

なお、著者の用いている言葉の中で、その関連を明確にするのがより理解しやすいと思われるも

のがある。例えば、第1章で、「日常生活の中に病院医療が深く入りこみ、医療の専門知が社会を支配する医療化社会」と述べているが、第2章の中では、「医療の社会化、すなわち国民のすべてに対し、治療給付及び予防給付を受けうる機会が均等に与えられるよう、国家ないし社会の責任において給付の提供方法について措置を講じていくこと」となっていて、この両者の相互の関連が判然としない。また、多数の資料を踏渉し(注)として掲載しているが、その中で『厚生指標』とあるのは、財団法人厚生統計協会(現・一般財団

法人厚生労働統計協会)発行の月刊誌の名称であり、著者が引用しているのは、同誌の増刊号である『国民衛生の動向』であると思われる、中には、109ページ(4)のように正しく書かれているところもあるので、正確を期した方がよいのではないだろうか。

(宮武 光吉)

[法政大学出版局, 〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-7, TEL. 03(5214)5540, 2011年11月, 四六判, 259頁, 2,800円+税]

香月牛山 原著, 中村節子 翻刻・訳注 『老人必用養草——老いを楽しむ江戸の知恵——』

日本医史学会(2011年6月)での演題発表後、5カ月で単行本として出版されたというスピード出版の本である。それだけ現在の超高齢化社会で待ち望まれる書だったのであろう。

本書は大きく3部から構成されている。日本医史学会の理事長酒井シヅ氏による「序——老いを生き、老いを楽しむ江戸の知恵」、中村節子氏による全5巻から成る本文の翻刻と訳注、同学会理事小曾戸洋氏による「解説——香月牛山の生涯と業績」である。このような短期間で本書が出版されたということは、執筆者たちに本書に対してのふだんからの準備があり、機が一気に熟したと思われる。また出版社にも必要性の認識があり、1,500円という低価格での販売に踏み切ったものと思われる。これら4者の協働があつて、この世に出版されたのであろう。

学会発表時の共同研究者としての立場からみると、本書は日本医学史上きわめてユニークな位置づけにあるといえる。日本の医学に老人のことが専門的に取り上げられたのは桃山時代の曲直瀬道三『啓迪集』の「老人門」である。しかしこれは医者向けの専門的な医学書であり、漢文体である。老人を対象とした専門医学書としては江戸期

の本書が最初である。『国書総目録』のなかで「老人」という名前のついた書物の項目をみてみると、宗教書、教訓、雑記、随筆、雑史、などの分類で約20冊掲載されているが、医学書に分類されるものは本書が唯一である。

牛山(1656-1740)は九州出身で、若い頃には貝原益軒に学んだ経験を持つ。本書を著したときは60歳で84歳まで長生きをした。益軒の『養生訓』(1713)にも「養老」の項目があり、益軒も長生き(84歳)をして養生を実践したと思われるが、牛山も書き著したことを自ら実践したと思われる。現代の医療系・福祉系学生だけでなく、医療実践者自身にとっても老年期の参考になろう。

『老人必用養草』(1716)は江戸期の日本人のくらしと老いの「保養」を説いたものである。巻1 養老総論、巻2 飲食、巻3 衣服、住居、季節、巻4 精神保養、身体保養、性欲、巻5 老人疾病治療、付録諸薬の処方、で構成されている。訳注にあるように中国の医書、特に元時代の『寿新養老新書』がよく参考にされている。文体は漢字かな混交文で読みやすく、漢文ではないことから一般庶民を対象にしているが、付録に薬方が載っ